

弄花抄の基礎的資料稿 (一)

森 一 郎

甲南女子大学研究紀要（昭和四十六年三月）所載の「弄花抄の基礎的資料稿」(一)の続稿として(二)をここに収める。広島大学蔵、平瀬家旧蔵本弄花抄（伊井春樹氏翻刻）を底本として神宮文庫蔵の弄花抄を校合したものである。ここには、松風、薄雲、槿、少女、玉鬘、初音、胡蝶、蛩を収める。

一 語 弄 花 抄 三

松 風

卷名 歌并詞をもて号す 此卷には源氏卅歳事也絵合卷も

同としの春の事あり

1 東^の院つくりはて、(五七九1・191) 二条院の東^の院なり

蓬生の卷よりつくり給よしみゆ

2 母君の御おほち中務宮(五八〇1・192・) 明石尼のおほち中

務宮也前中書王兼明親王号小倉宮これに比して書り

3 民部大輔の君ニ申(五八一4・193) 民部大輔伊行 兼明親王
二男

事をよそへたり

4 つなしにくき(五八一5・193) つれなしを略したる也

5 はちふき(五八一6・193) はらたつ舛也

6 つくらせ給御堂(五八二5・194) 大覚寺の南とは栖^寺殿^をを

思て書入一オVる也彼寺は融公の山庄なりしと云、花

7 滝殿の心はへなとをとらず(五八二6・194) 泉殿など大覚

寺にをとらぬと也

8 諸共に都は出つこの度や独野中の道に迷ん(五八四5・

196) とはたよりになき心也

9 をくりたにとせちに(五八四8・197) 明石入道を送りに

もとさそひしなるへし

10 にしきをかへし(ハカ) (五八四 5・197) よるの錦の心にて書り

11 世をてらし給へき光しるければ (五八五 12・198) 入道瑞夢を思て云り

を思て云り

12 天にむまるゝ人の一 (五八五 13・198) 天人のかりに此界男な

とに來りて又天ニ帰る事有其たとへ也 正法念經云 天上ヲ

欲(ニ)退(カ)時心(ニ)生(ニ)大苦惱(ニ)地(ニ)獄(ニ)諸苦毒(ニ)十六(ニ)不及(ニ)

一又經云果報若尽(モ)還墮(レ)三途(ニ)別ノキハノ悲ノ深キ事(ヲ)

手本ニ此經文ヲ云習ハセリ入道ノ女ノ別悲ノ事ヲ申也ハ一

ウ ヲ

13 命つきぬときこしめす共 (五八六 1・198) 此所ニ藤の衣に

なやつれ給そなと云詞の有本本有あり其詞は若菜卷ニあり河重

説不可用也

14 むかしの人もあはれといひける (五八六 6・198) ほのく

との哥の心也

15 うき木にのりて (五八六 11・199) 舟の心也うきたる心有

16 故郷ふるさとにみし世の友を (五八七 10・200) 明石上哥也明石上た

とひ京にて生給共二三歳ニハ過へからすみし世の友とは古

郷なればよめる歌 誰となく其入道などの事にてもあるへ

き歌

17 かつらにみるへき事有を (五八七 13・200) 嵯峨ニ堂立給を

大やうかた二くとの給にや 又桂の院など修理の事も有しとみ

ゆ桂院事花別 注之

18 桂の院と云所俄につくろはせ給ときくは (五八八 2・200)

此詞も紫上のやうにて大井と桂とをおなしやうに心えての

給にやハ二オV桂院は桂宮院を思へるにや太秦寺辺西也云

桂院は桂宮ノ事歌

19 れいのくらへくるしき御心 (五八八 5・200) 源氏大井へ渡

り給時紫上の心ゆかぬをみて源氏の給詞也源の心と紫上くの

心との同しからぬやうにくるしき也

20 いにしへさまのなこりなしと (五八八 5・200) 源氏のすき

心もいにしへのやうにはなしと人もくと云物ヒをと也

21 桂院ニ渡り給へしと一(五八九六・202) 桂院へ参たる人々
の大井へ尋まいりたる也

22 つくろふへき所くのあつかり今くはへたる (五八九五・
202) 家司など大井の宿の事也

23 たつ時物うく(五八九一・202) 源氏須磨などにてやり水な
とに心とゝめ八二ウV給ひし事を思給也大方も此^{ナレ}理有事
也

24 むかし物かたりにみこの住給ひける (五九〇一・203) 中務
宮の跡なれば其事を物語し給出したり尼公のあさきねさし
ゆへやく^なと卑下の詞をなくさめん心にて彼親王の事をの給
也妙也^{ナレ}

25 水のおとなひかことかましう (五九〇二・203) 水の音も思
をそへたる心也

26 御寺に渡り給て (五九一三・204) 嵯峨御堂の事也

27 十四五日卅日 (五九一四・204) 仏の縁日にや兩度也末に月
に二度^{よたひ}はかりの御契也と有も此たよりにや

28 ありし夜の事 (五九一七・204) 明石にて岡へかよひ給ひし

事也

29 おりすくさすかのきんの御こと (五九一七・204) 明石にて
も符のこゑを聞給し事ありき八三オV

30 またしらへもかはらす (五九一八・204) いまのやうに覚給
也明石巻にこの音かはらぬほとにかならずなと契給ひし時
の事也

31 かはらしと一ねをそへし哉 (五九一八・204) 我なくねをそ
へし也

32 さと遠しや (五九二二・205) 引哥河里遠みいかにせよとか
かくのみはしはしも見ねはこひしかるらん^む

33 木丁にはたかくれ (五九三三・206) すこしかくれたる也は
たはそへたる詞也^{ナレ}

34 きしかたの物忘れ侍らねと (五九三三・206) ゆけいのそう
の詞也

過にし事共忘かたけれ共かたしけなくて申かたしとうれへ
かくる^る也

35 やへたつ山は (五九四一・207) 雲の事也山里のさひしさは
明石の嶋かくれなにもをとらず松も昔のとは誰をかもし

るへにせん人の心也友もなきに昔忘ぬ人の詞をたのもしと
八三ウV女のこたへたる也引哥海一

36 こよなしや我もおもひなきにしもあらざりしを(五九四3

・207) こよなしやとはすくれたる事也我も思ひなきにしも

とは須磨明石にての浮沈の思は我もありと云心にや 女房

のしまかくれにもをとらずなとあるよしを云たるにあは

せてわか思をいひも出はやの心にや衛門尉紀伊守か 詞也花

鳥紀伊守弟良清也如何良清は播磨守子也良清か明石上ニ

思なきしにもあらざりしと云に似たりさて良清かと云儀ア

リ不用之是はゆけいの尉か語也

37 御車のしりに(五九四5・207) 頭中將 兵衛督誰ともなし

38 小鳥しるしはかり一(五九四12・208) 荻の枝小鳥をは荻な

とに付也云、八四オV

39 御みきあまたたひすんなかれて川河のわたりあやうけなくれ

は(五九四13・208) 酔中ニきしちかき人々の事也

40 おほみあそび(五九五1・208) 御遊也

41 けふは六日の御物いみ(五九五5・208) さして何事となく

共六日なとつゝきたるにや

42 月のすむ川河のをちなる(五九五8・208) かつらのかけはを桂

の里によそへてよめりのとけかるらんむは長閑に月もすみて

おもしろかるへしとほめたる心也

43 久方のひかりにちかき(五九五14・209) 次詞ニテみゆ

44 行幸まちきこえ給ふ心はへ(五九五14・209) 哥に朝夕霧も

晴ぬと有は行幸なとあらは光有へしと云心也

45 中におひたる(五九六1・209) 引哥八四ウV

46 みつねか所からくも(五九六2・209) 引哥あはちにて

47 めくりきて手にとるはかり(五九六4・209) 面影のちかく

さやかなる心也

48 右大弁すこしおとなひて(五九六5・209) 誰共なし或左大

弁云、

49 雲の上のすみかを捨て(五九六7・210) 花鳥ニ故院事をよ

めると云、霞の谷の心有歎

50 近衛つかさの名たかきとねり物のふし共(五九六12・210)

花鳥ニ云今案物節のといふは近衛の舎人の中ニ東遊ニ連し

たる物を物節ニ補す

51 ひるのこかよはひに(五九八5・212) 明石ナシの姫君三歳也

52 いはけなげなるしもつかはもまきらはさんナレ (五九八 6)

212) 花鳥袴着事云、

53 引ゆひ給ひしナレ (五九八 7・212)

54 おもはずにのみ取なし給ふ (五九八 7・212) 紫上詞也源氏の心へたて八五才Vあるやうに思ナレはすなる事をのみの給程に我もあまり見しらぬやうニあらんやナレとてこそすこしもえんしなともすれとなり

うす雲

卷名哥によて号す 此卷ニは源氏卅歳の冬より次年の秋までの事あり

1 つらき所おほく心みはてんも (六〇三 3・215) 宿かへて待ニもみえす

2 いかにいひてかなと (六〇三 3・215) 拾遺恨ての後さへ人のつらからはいかにいひてかねをもなくへき

3 かくてのみナレくひんなき事也思心あれは (六〇三 4・215) 中宮にとおほす心也八五ウV

4 はかまきの事 (六〇三 6・215) 一勘大略三歳時有之但五歳

以上例又勿論也花山院は九歳ニテ着袴云、愚案此勘思ナレ直給欵ナレ此はかまきの事ナレは明石姫君事也女人の勘例あるへき事也
一勘

大略三歳時有之五歳以上例又勿論也花之説は九歳着袴云、

5 さおほすらんと思渡る事なれば (六〇三 7・215)

6 さきの斎宮のおとなひものし給 (六〇三 11・216) 紫上廿四才

秋好廿二改三 斎宮は神に十四也紫も同程なるへし紫のうしろみナレ給にはおとなしき也

7 猶本台の心さしむかひたるをとりナレの所ナレは (六〇五 1・217) をとり

8 いと、たつきなき事をさへ取そへいみしくおほゆへき事と (六〇六 2・218) いみしくはつよくかなしかるほしと也

9 雪まなき吉野の山を (六〇七 2・219) 雪深き吉野の山成共尋ねナレ八六才Vかよはんと也唐の吉野の山に籠る共の哥などの類也

10 此春よりおほす御ナレくし (六〇七 7・220) かみをきの事にや

11 あまそきのほとにて (六〇七 7・220) さけ尼の髪ほとと也

12 みつからいたきて出給へり (六〇七・12・220) 明石の上はつ

ねははしちかくもくあはさりしか此時はむすめの別ニ忍給はぬ心あはれ也松かせの時のさま思可思へし

13 にしおもてをことにしつらはせて (六〇八・8・221) 二条院にて西おもて成へし

14 まいり給へるまらうと共一 (六〇九・8・222) 明石の姫君に

つきてまいりたる女共の心也人々の出入ひまなきをみる也
15 たすきひきゆひ給へる (六〇九・222) 和秘抄ニみえたり花

鳥ニ別ニ注し給はぬをみしりて也ナシふりはへ給へる わざと

渡り給事也ハ六ウVとあり一勘云今世無存知人頗秘事也

16 としもかへりぬ (六一〇・3・223) 源氏卅一歳歳也

17 おとなしき程のは七日御よろこひなとし給 (六一〇・5・

223) 年始の礼の事也或は七日なとにまいり給人もあるへし
18 あすかへりこんと (六一一・8・224) 催馬楽屈云桜人の哥の詞也

19 虫とむる一 (六一一・10・224) 桜人に其虫とよめと云詞有上

の詞をうけてよめり舟とむるとは源を明石上上のとよめんと也

20 行てみてあすもさねこん (六一一・12・224) あすもさねこ

しと云も桜人ニ有哥の心は明石上は中ノ心ぞく共あすかへりこんと也花鳥ニあすはやくかへりこんなり 和一只

あすかへりこんとなるへし実字ノ心歌

21 たよのつねのおほえに一 (六一二・6・225) 明石上のよの

つねにもあらはハ七オV是ほと心くるしくも思まし明石入道の思はん所斗をこそおもはめ明石の上の人のほとなどはさしも思ましき事なるを人からの御心に入たる故に立かへりけふもくるしくなけれ給と也

22 夢の渡りのうきはしかと (六一二・9・225) 引哥世中は一引

哥ならても夢の程に行かへる心ちし給なるへし

23 かのおかしにてさ夜更たりし (六一二・12・225)

24 こはかゝる所なれと (六一二・13・226) 大かたなる所にて

は物まいりなとする事聊爾にもなかりしにや

25 女もかゝる御心のほとを見しり (六一三・3・226) 源しのを

しへの様にはし給はぬをみしりて也

26 ぶりはへ給へる (六一三・8・226) わざと渡り給事也ハ七

ウ

27 其比おほきおと、うせ給 (六一三・一一・二二六) 太政大臣 葵上
父事

28 ことしはかならずのかるましき年と (六一四・一三・二二八) 卅七
歳は女のつゝしむ年也

29 命のかきりしりかほに侍らんもくどくの事なとも (六一四・一四・二二八)

一四 14・228) 此心つかひ上らふしく感ある

30 かうしなとをたに (六一六・八・二二九) 柑子無毒病者の兩物
云、只はかなき物をとみるへし

31 殿上人なとへてひとつ色にくろみ渡りて (六一八・二・二二九)

231) 服衣事也諒聞なるへし

32 山きはの梢 (六一六・五・二三一) 峯の木すゑ也

33 人きかぬ所なれば (六一八・八・二三一) 此哥のおもしろきを
人きかぬ事をかけり八八オ

34 古入道宮の御母後の御代より (六一八・一〇・二三二) 薄雲の御母

の事先帝后也

35 法師はひしりといへ共 (六一九・九・二三三) 一勘何事とは定く

かたし如寛算供奉事歎 かゝる事のためしをおほしけるに
や又大かたにてもさも有事也

36 仏天のつけあるによて (六一二・〇・三・二三三) わさとかく奏した
る也

37 その日式部卿みこうせ給 (六一二・一四・二三五) 桃園宮事なり

38 もろくしにも侍ける (六一二・二・八・二三六) 聖代ニも不思議なと
有事不可勝斗也

39 もろこしにはあらはれても忍びても (六一二・三・九・二三七) 秦始
皇は楚莊襄王の子として即位す実には臣下に通して所生
云、史記八八ウ

40 一世ノ源氏納言大臣に成て後ニ (六一二・三・一一・二三七) 光仁天皇
元大納言宇多侍従河一

41 太政大臣ニ成可給定あれと (六一二・三・一四・二三七) こゝにては未
任給也

42 御くらゐそひて (六一二・四・八・二三八) 従一位なるへき歎

43 権中納言になりて (六一二・四・一一・二三八) 葵上兄也

44 命婦はみくしけとのゝ (六一二・五・一・二三八) 王命婦也

45 世中のさはかしきなと事つけてやかて御しやうしんなれば

(六二五13・236) 下の心は薄雲周章也

46 かくれはとにや (六二六5・240) 古のむかしのことをいと

ははいかくれはナレ袖ナレぞ露けかりける 小町姉

拾遺我おもふ人は草葉の露なれやかくれは袖のまつもほつらん

47 もえしけふりのむすほ、れ給けん (六二六13・240) 河海引

哥むすほほれもえしけふりをいか、せん君たにかけよなか

き契を此引哥叶吹むすほ、れ給けんとは御息所の思の事也

ハ九オV哥の詞をかる也

48 いま一はの給ひさしつ (六二五14・240) 薄雲の御事にや

49 此門ひろげさせ給て (六二七12・241) 于公高門事見河心

は秋好のさいはいにて源氏の一門も繁昌せん時トとなり

50 としのうち行かはる時この花紅葉 (六二八1・224) 六条院

つくるへき心さし也

51 もろこしには春の花の錦にしく物なしと (六二八4・242)

見河 晋石季倫居金谷春花ナレ薄林ナレ

52 やまとことの葉ナレとは秋のあはれをとり立てテ (六二八5・

242) 万葉河ニ注アマり 春はた、花のひとつへに咲斗物のは

れは秋そまされる此哥なとにてみるへし

53 あやしとき、し夕こそ (六二八11・242) いつとても恋しか

らすはあられとも此詞殊勝也いつれともこたへかたき事な

るを母御息所ハ九ウVの事によせての給へるあはれにおも

しろし云くナレ

54 君もさはあはれをかはせ (六二八14・243) やかて秋後に見同ナレ

心してしかも人しれぬ思の色をあらはし給ふ也さはにこる

也

55 おほろけに思忍たる御うしろみとは (六二七6・241) 斎宮

に源氏の詞也おほろけならずの心なるへし思ナレひ忍たるは源

の下の思ナレひをの給へり

56 つらからんとて (六二九7・243) つらからん人のためには

つらくしてつらきはつらき物としらせん

57 これはいとにけなき事也 (六二九13・244) おそろしうつみ

ふかきかたは源しの心に 秋好を思給事と薄雲にかよひ給
し事とを思くらへ給に薄雲の事はなをつみふかき事也され

ともその古は年わかき程にて思やりなきにゆるさるゝかたもあるへしとおもひさまし給也 八一〇オV

58 なをこの道はうしろやすく (六三〇2・24) 源しの年たけぬれた好色の道の事わかき時のやうにはなくのとかに思惟惟んもふかき心まさりてうしろやすしと也

59 君の春のあけほのに心しめ給へる (六三〇5・24) 紫紫の上の春を憐み給事此詞よりみえたり

60 かゝるすまゐにしほしまさらしかは (六三一3・24) めつらかに明石にての事也

61 いさりせしかけわすられぬ (六三一5・24) 此哥殊勝也明石にての物思思ひも大井にての心つくしもおなしきに又鶺鴒舟のかかりの海士のいさりにまかふをよせてうき事のはなれぬとなり八月比かたゝ並にまかふ心なるへきにや

62 たれうき物と (六三一7・24) うち返しおもへはかなし世の中世をたれうき物としらせそめけん 八一〇ウV

63 別当共 (六一一1・22) 東院にての事也 一勘愚本とは此説無所見家司ともあり其事故

權 文明七秋下旬僧宗祇爲弟子與復誦之 肖相卅三才

卷名以哥号之

此卷源氏卅一九月ヨリ冬の末まであり宮内大臣ナツ

1 斎院はおほん服にて (六三九1・24) 此卷に宮と称する人

五人也横前斎院父桃園式部卿女五宮三宮致任北方薄雲女院等也

2 長月ニなりて (六三九3・24) 斎院おりの給ナツひて先別所に

居住て今もゝそのゝ宮にうつり給とみえたり桃園宮は今の

八一一オV 仏心寺其跡也

3 御物かたり (六三九8・24)

4 いつかたにつけても (六四〇6・25) 桐壺帝崩御以下源氏

すまにくたり給ナツはとの事共也

5 きよらに (六四〇9・25)

6 うき世のなげきみなさめぬる (六四一4・25)

7 さるへき御ゆかりそひて (六四一5・25) 三宮源氏をむナツこ

八ナツはなり

8 すとし耳とまり (六四一7・25) 女五宮の物語聞にくき事

もありしに権齋院の事をくはへ給く^{時(二)奈(一)}殊耳とまり給なるへし

9 神さひにける(六四二・三・252) 在河源氏の久しき恋慕の身
をいふ

10 ありし世はみな(六四二・四・253) 此詞齋院の語人伝にて也
11 こゝらつれなき(六四二・八・253) 源氏身つからつれなく世
にふる心をよみ入一ウV給なり

12 いまはなにのいさめにかかこたせ給はん(六四二・八・253)
齋院おりの給ぬれはいさめもあらしとの給也

13 世にわつらはしき事(六四二・九・255) すまへ行給ふ事^しく^な也
14 かたはしをたに(六四二・10・253) 人つてならてきこえはや
の心なり

15 御よういなとも(六四二・11・253) 源氏をほむる也

16 いたうすくし給へと(六四二・12・253) 源氏の位より年わか
くみゆる也

17 なへて世の^{源歌}一(六四二・13・253) なへて世の事をとふをも猶
神やいさめん^むと齋院のよみ給へる也

18 あな心う(六四二・14・253) 源氏の詞也^{ナシ}

19 しなとのかせ(六四二・14・253) 中宮被之詞見河海^{ナシ}固^{ナシ}神^{ニ(二)イ(一)}

(事用此語
一(三)ニ(三)ナシ)

20 みかきを神は(六四三・1・254) 源氏語 恋せしとみそきを
神はうけす入二オVとか人を忘るゝつみふかくして人を
わするゝはつみふかしなといさめ給心也

21 世にしらぬやつれをいまそとたに聞えさすへくやはもてな
し給ける(六四三・5・254) 源氏の恨給へる詞也

22 あさかほをおりてまいらせ給(六四三・11・254) 九月卅日な
り

23 けさやかなりし(六四三・12・255) 以下源氏よりの文の詞也
24 みしおりの露一(六四四・1・255) 花のさかりは過やしぬら
ん源氏あふ事をいそき給心也

25 につかはしき御よそへ(六四四・5・255) さかりは過やしぬ
らんと云心に取なして露けくなとあり

26 人の御ほと一おほかりけり(六四四・8・255) 双紙の作者の
詞也

27 もてはなれぬ御気色ながら(六四四・12・255) 齋院の源氏に

一向にはも^ハ二ウ^Vてはなれず文などはかはし給はぬと也

28 ひんかしの台^(マ)(六四四13・256) 二条院の東台也^(マ)

29 さらかへり(六四四13・256) 更にかへりたる心

30 はかなき木草に付たる(六四五3・259)

31 おなしすち(六四五11・257) 紫上式部卿息女也極齋院又宮の御子なるよし也

32 人のことはむなしかるましき(六四六5・257) 人の言也とは夏の、しけく共などの類也

33 神わきなど(六四六7・257) 薄雲かくれ給 桃園^ウの宮などの儀によて也

34 心よはからん人は(六四六10・257) 極の宮の真心あるよし聞えたり

35 しほやき衣(六四六13・258) 引哥河海

36 宮に御せうそこ聞え給ひて^ヒ(六四七2・258) 源氏女五宮へ

出給へき^ヒ二オ^Vよしを先啓^(マ)ひし給し也

37 にひたる御そ共なれと(六四七4・258) 一勘凡装束事也

38 けふしも渡り給はしと(六四七13・259) 夜ふけなどするを

の給心也

39 うすすき(六四七14・295) さむき躰也

40 こほ[。](六四八1・259)

41 昨日けふとおほす程に三とせのあなたに(六四八2・259)

須磨^ハへうつり給しほとなど也源卅一歳心可然歎歸京以後四年なり桃園荒たる所にての心也

42 三とせ(六四八2・259) ^{1本}源氏卅一才なり其程を思給也みとせを可用

43 いひきとか(六四八9・260) 源しいひきなど聞ならひ給はぬ歎

44 この宮の御てしにて(六四八13・260) 源内侍事也厄なれば云歎

45 こ院のうへは(六四八12・260) ^ハ二三^V

46 おやなしに(六四九2・260) 源しおやもなしとの給云、源氏仁の心ふかくていかなる事をも捨給はぬによりあへしらひ給^ふ也

ひ給^ふ也

47 うちされんとは猶(六四九5・260) され事の心也

48 いひこし程に(六四九5・260) いたく老たる心にや一勘源

内侍の年のよりたる事をなけく詞也

身をうしといひこし程に今は又人の上にもなけくへき哉此
哥しるて心かなはず人のうへとおもひし老の身のうへに成
ぬるなと云へき所也源内若年とみし人くも身上にいひし老
の来程にみなす事をいふ歎

49 物あはれなる (六四九 7・261) 源しのあはれみ給ふを源内
侍猶昔の心忘ぬなるへし

50 としふれとこの契こそ (六四九 13・261) 子にそへておやと
よめる也 八一四オV

51 きたすき (六五〇 11・262) さかり過たる^心也

52 心つからの一 (六五一 1・262) 引哥不叶

53 あらためてなにかは (六五一 3・263) 齋院の貞なる心をな
にかはあらためて人の心のさためなきやうにはみえんとよ
み給也

54 かるらかにをしたちて (六五一 8・263) 源しの心人の心を
やふりてをしたる事などはあるましきと女共の云也

55 おほししらぬにもあらねと (六五一 10・263) をしなへて源
氏に人のめて奉ることくなひき給ふとみえなはかひなしと

齋院の思給ふ類也

56 かつはかるくしき (六五一 11・263) 心のほとをも源しの
見給はんをはつかしと也

57 しつみつるつみ (六五二 1・263) 齋院にて法事し給はぬ程
の事也 八一四ウV 尼に成給はんくころはへなり

58 中くいまめかしき (六五二 2・263) 齋院の心つかひやさ
しくありかたき心也

59 御はらからのきんたち (六五二 5・264) おとりはらにてむ
つひ給はぬなり系圖に見えね共おはしましけるなるへし

60 ひとつ心とみゆ (六五二 8・264) 同心に源しに人々の心を
よせし也

61 かけてやみなんも (六五二 9・264) 源氏の心はきくの巻
にひきたかへ心つくしなる事をなとありしかことし

62 むかしよりもあまたへまさり (六五二 11・264) 源氏世にへ
たまひて事のさまく心まさり給也

63 宮うせ給て後 (六五三 2・265) 薄雲女院うせ給事

64 かくなんあるとしも (六五三 14・266) 紫上にはかなし事を
しもかたるへきかはとて源氏の給し也 八一五オV

65 すさましましためしに (六五四 6・266) 清少納言か枕草子ニ

しはすの月夜と云詞なし異本などにかける歎如何小野篁か
記に有と云儀有私勘枕草子冷しき物のうちに無之

66 さま／＼のあこめみたれき(六五四10・266) 一勘わらは、

かさみをき侍れとそれをはぬきてあこめはかりきたるにや

67 帯しとけなきとのゐすかた(六五四11・266) 間帯ははかま合点

の帯の事にや一勘とのゐすかたは宿直くすかた也

68 わらはけて(六五四13・267) おさなき駄也字濁一勘童氣て

といふ心也わらは共のおさなき心に興したる駄也云、

69 ふくつけ(六五四14・267) 力を入たるやうカ歎貧主ウツク遊仙生

70 中宮のおまへに雪の山(六五五1・267) 薄雲の御前山をにくつ山を

くられたる事例来ありしと也ナレハ一五ウV

71 しなし給しはや(六五五8・267)

72 さいへと(六五五10・267)

73 わつらはしきけナレ(六五五10・267) 物えんし也

74 さかしなまめかしきナレ(六五六2・268) 紫上詞

75 さも思ふにいとおしくくやしき事(六五六3・268) 源氏詞

臘月夜の事ナレ

76 人よりことなる(六五六7・268) 明石上すりやうの女なる

故也

77 恋きこゆる人の(六五七2・269) うす雲の事

78 かんさしおもやう(六五七1・269) 一勘合点かんさしは髪

のさまにや

79 わくる御心も(六五七2・269) 紫上をもとより思給ナレふに

又かさねて御心をしめ給ナレふ心也一説とりかへしつへしわく

る心を又返して思給也

80 雪もよに(六五七4・269) よにの二字語助にや云、但哥に

すこし心あるハ一六オVやうに聞ゆる詞也可思雜云、又夜

又催云、

81 うちもみしろかて(六五七11・270) 源氏事

82 うちにも御心のおに、(六五八5・270) 主上かねてよるひの

僧の奏し申つるによてよろつに源氏をかたし忝し給し程にいよ

くうす雲の御事をしらせたてまつらしと也

83 かけみぬ水のせ(六五八8・270) 三瀬川によせてよみ給

ハ一六ウV

おとめ

巻名

此巻に源氏年卅卅四十月二四ニ及ふ 雲井の應年十四よりなり

1年かはりて宮の御はて(六六五1・273) 薄雲諒閑事三月迄也

2衣かへ(六六五1・273) 更衣也

3空のけしき(六六五2・273) 諒閑の後世中の人の心も心ちよきおり也

4前齋院(六六五3・273) 祭の比齋院にての事などおほしめしいつるにいつしかつれくなる心也

5桂の木の(六六五3・273) 人々礼の御被オシなど思出オシへし

6大殿(六六五4・273)

7みそきの日はいかに(六六五4・273) 賀茂御被オシ日也 祭の

三日前也八一七オV

8かけきやは(六六五6・273) 君かみそきとは除服の日の被の事也いつしか齋院おりさせ給て除服の御被ヒ給はんとは

思オシひかけさりしと也御祝オシを思オシく歎オシ

9むらさきのかみ(六六五6・273) 藤にたよりあり藤は藤衣

よせアリ

10すくよか(六六五7・273)

11おりのあはれなれば(六六五7・273) 大かたは源しの文な

とをもむつかしく覚給にこれは哀なる事共なれば御返ある也

12藤衣きしは(六六五9・273) はかなくとはかり齋院の哥

の心はかなきオシことを詞にあらはさす文ニはかなくとありことにめてたし

13こなたにもたいめんヒ(六六六4・274) 女五宮齋院の御かたにて源しの事をの給オシ也

14故宮もすちことに(六六六6・274) 齋院ニる給事をの給し

也八一七ウV

15さらかへり(六六六12・275) 齋院おりる給て又源しのの給

まつはし給ふ事なり

16こたい(六六六13・275)

17いとうしろめたし(六六七2・275) 齋院御心也

18かの御みつから(六六七3・275) 源しの御心也

19御元服(六六七5・275) 夕きり十二才也

20 かの殿にて(六六七七・276)

21 右大将(六六七七・276) 二条摂政息也

22 世人(六六七七・276)

23 ゆくく(金)つりなからん(六六七七・276) おもひやりなきなり

24 あさきにて(六六七七・276) 六位の緑の袍をあさきと云用

之

25 殿上にかへり給(六六七七・276) 花童殿上の人加冠して又

殿上する事也

26 四位ニなしてんと(六六七七・276) 花ハ「ハオ」

27 をいつかすましう(六六八一・276) 昇進に人の遂付かたき

心也

28 夜ひる御前に(六六八五・276)

29 文さえ(六六八六・276) 文才本文のさえ

30 はかなきおやに(六六八八・277) 愚親ニ賢子のまさらぬと

也況愚子乎

31 心のまゝなる官さく(六六八八・277)

32 はなましろき(六六八八・277) 本 めましろきイ心は用也

鼻おこめかしなとする也

33 さえ(六六九二・277) 才

34 やまとたましる(六六九二・277) 日本のめあかしなと云心

也一禪説云、

35 せまりたる(六六九六・277) 窮者として大学の道にてそのま

ゝ昇進なともせぬ人をいふことには卑下の詞也

36 大将左衛門督(六六九九・278) 左衛門督は大将の弟也ハ一

ハウ

37 ひんかしの院にて(六六九四・278) 二条院の東の院なり

38 家よりほかにもとめたる(六七〇四・278) 借衣也

39 かたくなしき(六七〇五・279) 本

40 右大将民部卿(六七〇九・279) 民部卿無先祖見系図末

41 おふなく(六七〇九・279) ねんころなる也

42 おろす(六七〇一〇・279) おとろかしいさむる也

43 をしかひもとあるし(六七〇一〇・279) 乙卑下の詞也垣下キナき

んたちと云事アリ大舞などにも人数の外の人のましはりた

るをゑかのきんたちと云あるしは主也ことにてても大学ノ衆

ならぬ公卿非常ひさうなりといふなり

一座につき給へ共垣下とは云也人数の外をゑかといふ故

歎

44 かくはかりのしるしとある一(六七〇11・279) 大学の衆の詞也一儀儀ナレニ云かゝる八一九オV 大学ノ衆ニ大将兵部卿などのかしかいものあるしにてかはらけ取給ふ事あるまじきと云心也

しらすしてとは大学の程をもしらてあるしし給事と也一儀云しるしとある大将等の公卿をしらては大やけにつかふまつるへき大学の衆ならんやはと也

45 なりたかし(六七〇13・279) 河海ニ風俗の鳴高ナウケウの大宮或号詞をひけり不叶歎問云飛鳥高鳴何の文そや一答河海抄ニハ不見

鳴高下云事ハアリ

46 さるかうかましく(六七一5・280) 猿葉はふるくもありきとにや心におもひ入ぬ事をもふるまひ云物也大学の衆源しの仰に随てことにきひしくおこなふに喩たるなり

47 けうさうし(六七一7・282) けさうつる也人をほめなとするもけさう八一九ウV する也或本けうまんとへは同心歎48 はかせさい人とも(六七四13・283) 才人さいしんとよむへし一勘

49 左中弁かうしつかうまつる(六七一13・280) 無先祖

50 入学といふ事(六七二8・281)

51 御さうし(六七二8・281) ヲンサウシ一禪

52 た、四五月のうちに(六七三3・282) よつきいつ月と可モトメ証

歎

53 れうし(六七三4・282) 大学寮にての試なり寮試事 宗祇

問 一答写之

一花鳥余情云試ニハ史記をよましむる也よくよみえたる人を擬文章生ニ補す次ノ詞ニ大学寮にて心見える及第の人を文章得業生ニ補す云、擬文章生と文章得業生と同事ヒ歎ハ二〇オV

大学寮にてはしめより学問したる人を試ニ及第せるをは文章得業生といふ也又昔は諸国ヨリ才人を年貢ニと奉る事有それを貢士共進士共云是を大学寮にて試ニ及第せるをは擬文章生と云同事のかはりたるへし

一式部省にて課試をとく先詩賦を作ル次ニ策の文をかく策の文とはいかやうの事にか、策の文とは儒業ニの一大事也たとへは同者の儒士ありて題を出して其題の事を対句ニ

書て不審をたつるを献策の人一々に又対句に書て証文を引てこたふる事也策の文は本朝（文永）の粹（イ）の第三の卷ニアリそれを披見あるへし

一秀才進士の二科あり秀才をは方略と云ハニ〇ウ方略は無端の大事といふ心也

方略といふ事猶以不審如何

秀才といふはさきの文生得業生に成たる人にとふ事也方略の二字は無端の大事と尺せる也かきりもなき大事といふ心也進士といふは擬文章生ニ成たる人の事也

一献策の問題ニこたへてかくときはめたる大事也

献策（イ）の問題のやう如何

その問題さたまらず文粹ニ出せる事は或は神仙（イ）或は神祠鳥獸言語運命山水松竹かやうの題ニつきてその古事を不審する事也題は時にしたかひて尽期なき事也

一進士をは時務策といふ 此儀如何昔は時務策と云ハニ一オVて当時の政道などの事をいかにしてかよかるへきと問ル、事を文に書てこたふる也或又方略の宣旨をかうふりて献策の文にかく事もある也

一方略の宣旨をくたされて式部省にて課試せらるゝなり方

略宣旨如何 進士の人方略をかうふる事也

一進士は時務策たりといへとも方略の宣旨をかうふれば方略の試也 此意如何 上ニいふかことし

一文章生の方略を蒙て献策する事は当職の時と又外国の掾ニなりたる時と散位の時（イ）にかうふる也京官ニ任して後是不献策ならひ也 当職とはいづれの職（イ）にや京官の人不献策とは如何

当職とは文章生の当職也其後諸國の掾ニ文章生なるハ二一ウV事アリ國の掾ニなりては一任四ヶ年とて五年めには前官ニなるそれを散位といふ也此間ニ献策をはする也何事も京官ニ任しては献策の事はなき也それを非成業（イ）の人と云也夕霧の大將はこのつらの人なり

一或は文章生さらに得業生（イ）に転して課試の儀もアリ文章生と得業（イ）との差別如何

さきに擬文章生と云人文章生ニ成て或は又文章得業生（イ）ニ成事ありこれは稀なる事也

54 左大弁（イ）（六七三・282）三人不見前祖

55 つましろのし（イ）こらす（六七三・282）不審の所ニ爪しるし

を付る也よくよみをきしよてのこらすといへり

56 おやのたちかはりしれゆく(六七三・二)の巻ニくれ物

のかたりけしなと云は八二二オVされ事などのことし説の云愚ノ字を万葉ニはされと訓せりもし其心歎云、たちかはりと云二叶へき歎

57 文人モノシきさう(六七四・二)擬文章生事云、一勘

58 弘徽殿(六七五・三・284)

59 兵部卿ときこえし今は式部卿にて(六七五・四・284)桃園の宮の闕ニなり給也一勘八省卿の中式部卿は親王ならてはな

らす兵部卿ニは誰も成官也式部はいさゝかまされるにや

60 御はゝかたにて(六七五・七・284)薄雲と式部卿宮の女の女御としたしき心也

61 梅つほゐ給ぬ(六七五・九・284)秋好中宮也

62 御さひはいの(六七五・九・284)母御息所ニ引たかへてめてたきさいはいといへり

63 母君あせちの大納言の北方に成て(六七六・二・285)誰共なし雲井の鷹の母事也 按察は五節奉る人なるへし系圖可加

八二二ウV

64 後のおやにゆつらん(六七六・三・285)まゝ父にそへん事を思也

65 ひわこそ女のしたるに(六七七・八・682)内大臣詞也

66 物の上手のゝちには(六七七・一一・286)明石入道延喜より後と云

67 ちうさす事(六七八・一・287)左の手にてをす事也

68 さいはいに打そへて(六七八・二・287)致仕摂政北方詞

69 女はたゝ心はせよこそ(六七八・五・287)内大臣詞

70 きさきかねこそ(六七八・一〇・288)明石の中宮のおさなきを云

71 ゐたちいそき給し(六七八・一三・288)致仕摂政のおはせまし

かはとの給也

72 此御事にてそ(六七八・一四・288)摂政北方と源しと又なき御

なからひなるを弘徽殿女御の後ニる給は給ぬ事にすこしうらみ給と也

73 いときひわに(六七九・一・288)いとけなきなり

74 りちのしらへのく(六七九・六・288)秋に成ておりにあふ調子也八二三オV

75 風の力けたしすくなし(六七九・八・289)文選第四十六陸士

御寮士賦序落葉俟^{アヲテ}以微風^{ヲテラフ}以頤而風之力蓋寡^{ケツシナシ}孟嘗^{ナレ}。遭^{ナレ}雅門^ニ

而泣^{ナレ}琴之感^{ハヒナリナレ}以未李善注引桓子新論雅門周琴事私

76 萩か花すり (六八〇5・290) 見花鳥

77 しのひて物の給ふとて (六八〇21・290) 内府のをんなと
にみそかくとの給ふ也

78 をく^くれたる事 (六八一1・291)

79 をく^くしう (六八二2・292) をとくくしき也かと有てな
らかならぬ也

80 まほならず (六八二5・292) まをとよむ説もあり先は舟の
まほかたほなどによせたる詞也まをとよむもほの字をやは
らけたる也

81 むなしき事にて (六八四3・294) 跡なき事などを人の云に
やと也

82 いつきむすめ (六八四12・295)

83 大納言殿に聞給はん (六八五8・296) 雲井の鷹の母按察大
納言の北方にて^ハ二三ウ^ウわたり給^ニき^キ給^ハんと^ト怱^ウる也

84 中さうしを小侍従やさふらふ (六八七6・298) 御めの子

なり雲井の鷹のめのと^ウ

85 さよなかに友よひ (六八八1・298) 自面なり聞テかなし

き心あるへし

86 身にもしみけるかな (六八八1・299) 引哥吹よれば身にも
しみける秋風を色なき物と思ひける哉

87 うへにつとさふらはせ給てよるおはしますめれば (六
八九1・300) うへ局^{弘殿}ニ内のつねにまし^くて女御もさらす
祇あるよし也

88 ある人々も (六八九2・300) 内大臣の女御のおもとの人共^{ナレ}
也雲井の鷹を俄にわたし給はんも人いか^ふと思^ふくへければ
先女御をまかてさせ給也

89 さくしり (六八九6・300) さかしくさし過たる也

90 くし侍 (六八九14・301) くつしとよむ

91 此比はしけう (六九〇8・301) 一月ニ三日はかり大宮へま
いり給へとありし詞ニ合てしけき也^ハ二四オ^ウ

92 左衛門督權中納言 (六九〇12・302) 致仕摂政の息也

93 夕つかたにむかへに (六九一3・302) 内へまいり給^ク間^ニ
雲井^ノ鷹^ノのわたり給はん用意あるへきため也

94 宮の文にて（六九一・10・302）大宮の文にて雲井の鷹の方への消息也

95 こめかしう（六九一・13・303）

96 わか君や人におとり給と（六九二・9・304）夕霧のめのと小宰相詞我君歎

97 さはれ（六九三・1・304）サワレ 又さはくれとよむ人ありく云く

98 そくやなとー（六九三・5・305）

99 大殿にはことし五節たてまつり給く（六九四・11・306）源しのまいらせらるゝ五節ニ惟光かむすめ参る也問云源氏君は公卿の分にや

一勘可然むすめなと持たる人にかけておほせらるゝ公卿分と又受領分とは國司たる人也これをうちの六節と名つけ侍りハ二四ウウ

100 うへの五節はよしきよいまは近江守にて左中弁なるんたてまつりける（六九五・4・307）問殿上人のまいらするをうへの五節と云河海ニアリ其分にや一勘殿上人のまいらするは大内よりの心也

101 みなとゝめさせ給マ宮つかへすへく（六九五・5・307）問五節とゝめ給事ハ俄の事にや一勘五節を宮仕ニめしをかるゝ事善相公か意見ニみえたり

102 とのゝまひ姫これみつの朝臣のつのかみにて左京大夫かけたるむすめ（六九五・6・307）問惟光女は源氏のおとゝのまいらせらるゝ分ハ又受領分歎一勘これは受領分也但源氏ハの君とりたてらるゝよし也

103 中宮よりくわらは下つかへのれうなと（六九四・14・306）源氏のたてまつる五節のさうそくなとをまいらせらるゝ也

104 按察大納言左衛門督（六六九五・3・307）大納言は先祖不見雲井鷹の母今は此北方也左衛門督は致仕第ハ二五オウ

105 うへの五節にはよしきよいまはあふみのかみにて左中弁なる（六九五・4・307）殿上人のまいらするを云事歎云、一辨左中弁以前の講師同歎

106 くつんしいたくて（六九六・4・308）

107 あめにますとよをかひめ（六九六・1・308）天照大神にてまします宮人もとよめるは天人也 舞姫を云

108 なをしなと色ゆるされて（六九七・6・309）六位禁色歎色云、

ゆるされてく、詞のかさりく、只なをしゆるしたる也 一禪御説

109 こゝしう (六九七・10・309) 巨々也 おほやうなる心也

110 おとめこも神さひー (六九八・2・309) 源しつくしの五節の
もとへつかはず哥也返哥袖にとけしも、五節逢たる事を思
よせたる也

111 あをすりのかみ (六九八・5・310) 五節の日ことに着する衣
色かはるへし辰△二五ウVの日をあをすりをきるによせて
かけり

112 あふみのはからさきー (六九八・11・310) 五節は内野にてや
かてはらへするを国の守によせてかくかけり妙也齋院など
彼所にてはらへし給事は有

113 その人ならぬを (六九八・13・310) 宇多御門御制あり

114 それもとゝめさせ給 (六九八・14・310) 五節にまいりし事を
云

115 みとりのうすやう (六九九・12・312) 六位の衣ニよれる也

116 きんちらは (七〇〇・4・312) なんちといふ心

117 とのゝ御心をきてをみるに (七〇〇・7・313) 惟光源しの心

を云也

118 かの人ほふみをたにえやり給はず (七〇〇・9・313) 雲の
鴈の方への事

119 はまゆふばかり (七〇一・7・314) 凡帳をいふ

120 宮はたゝ此君一所の (七〇一・12・314) 夕霧の祖母宮也△二
六オV

121 けゝしう (七〇二・9・315) ことくしき也

122 東の院の台の御方 (七〇二・10・315) 花散里住給ひし也

123 ついたちにも大とのには御ありきしなれば (七〇三・6・

316) 源氏君大政大臣にて節会などの出仕あるへき事にもあ
らざる故也

124 よしふさのおとゝときこえける (七〇三・7・316) 忠仁公之

例

125 忌月 (七〇三・10・317)

126 人々みなあを色にさくらかさねをき給ふみかとはあか色の

御そたてまつれり (七〇三・12・317) 一勤青色は麴屋とも号
すいまでも極麴のきたる袍也

赤色はあかねにて染之青色よりはたかき色也

あか色の御そとはうへのきぬの事也一勘同

127 わさと文人キモノもめますたゝそのさえかしこしときこえたる学

八二六ウV生十人をめす(七〇四・二・317)文人は儒者也学

生は今日及第すへき人を云その心かはれる也

128 又さはかりの事見てんや(七〇四・九・317)花の宴ウレの巻にも

春ウレく学ウレ嘸をまいしをおほし出たる也

129 おとゝ院ウレニくかはらけまいり給(七〇四・10・318)御しやく

たと取給心歎 一勘

130 鶯のさへつる声は(七〇四・12・318)舞は相似れ共こ院のお

はしまさぬ事をむつれし花とよみ給

131 いにしへを吹ウレへたへたる(七〇五・2・318)当代ウレを睹ウレし給

ふ心也されはあさやかに奏し給とあり

132 鶯のむかしを恋ウレ云、(七〇五・4・318)御製わか御代の昔に

及はぬ心はせをあそはしける也

133 御わたくしさまに(七〇五・5・818)御かウレと院ウレなど内ウレくの御

事也云、八二七オV

134 又かきおとしけるにや(七〇五・6・318)其席ニあまたの人

く出ウレしに哥をかゝる故にかく云也作者詞

135 進士ニなり給ぬ(七〇七・2・320)一勘秀才たる外はいつれ

も進士といふ也かならずしも中よりのほらねとも云付侍

也

136 二条京極わたりに(七〇七・8・320)六条宮の跡たるへき

歎

137 式部卿官あけんとし五十イッパに(七〇七・9・320)御賀の事

一勘賀儀先祖不同也法事ニは薬師経寿命経等供養の事あり

138 おとゝもけに過しかたき(七〇七・10・321)なをさりなる御

中なれは過しかたきと也

139 としかへりては(七〇七・11・321)源卅四なるへし賀の事あ

るへき也此事ありしとみゆ

●御としみの事 年忌なるべし賀の事あるべき事也此賀事

有しとみゆ(神宮文庫本)

140 ことにふれてはしたなめ(七〇八・3・321)源キミ式部卿官を

すこしよからぬ御中なりしは紫上キミたくひなき御おほえなり

しか共それにひかれて八二七ウV事を枉ウレ給はぬ心をきてを

あらはし給也

141 八月(七〇八・11・322)

142 くに (七〇九・12・323) 昔丹也 牡丹とも云夏の類ニかけ

143 五月 (七〇九・13・323)

144 上馬 (七一一〇・1・323)

145 五六月 (七一一〇・13・324)

146 過て (七一一〇・13・324)

147 わらはのこきあこめしをんのをり物かさねてあかくちはの
うす物のかさみ (七一一五・324) かさみはうへにきるあこ
めはきぬに必かさぬる也紫苑色はきぬの事歎一勘あかくち
ははよのつねの朽葉のあかきかたによりたる也

◎紫苑色はきぬの事歎あか朽葉はよのつねの朽葉のあかきか
たによりたる也かさみはうへにきるあこめはきぬに必かさ
なる也一勘 (神宮文庫本)

148 心から春まつそのは (七一一一〇・324) 心から春に心をしめ
給とももみちのおもしろきをも御覽せよと也

149 もちみちはるはるろし (七一一一三・325) 紅葉は花よりはるはるき也
いはねの松の春のおもきこそまされとよめり

150 良房のおとゝの例にてあを馬を引事 (七〇三・七・316) 八二

八オV 後代ニ其例を用たる事アリ良房公の時ノ事ナレは所見
たしかになくハナシ共ハナシいやあかし分ニとり置侍也一勘

151 あを馬を (七〇三・七・316) 白馬と云事 あをきまで白きと

云てあまりにしろき物はあをくみゆる故也七日節会をは青
馬の馬ともいふ礼記の文も青馬也一勘

玉かつら

卷名 以番号之

此卷 源氏卅五才

1 わか名もらすな (七一九・12・329) いぬかみの一万葉

2 その御めのとのおとこ少式に成て (七一九・13・330) 夕白の
めのと八二八ウV

3 うらかなしくも (七二二・1・331) 舟人のうたふ詞也別ニ子
細なし

4 舟人も誰をこふとかこしかたもハナシ行ハナシ系も一 (七二二・3・

331) 此兩首少式女兩人哥也 河海花鳥説少式夫婦哥也女子

いまた十歳はかり也そのよむへき事不審云々説者不同此儀

むかしの人おさなくよりよめり哥のまへの詞共にてしるへ
しむすめとの詞とみゆ云、おはせましかは我らくハナシくた

らさらまし花鳥少式下共妻はくたらしと也哥以下の詞むす
めにはおとな過たる歌如何

5 かねのみさき過て(七二一・五・331) かねのみさきを心に忘

ぬと云也引哥のすへ神とは皇神とかけり一勘云皇神と書テ

スへ神とヨメリ若其き事歎不分明

6 此君の十八はかりに成給か(七二二・12・332) 少式任五年四

才にて下向

7 ざるへき人(七二二・1・332) 八二九オV

8 わか身の孝をば(七二二・4・332) 臣の志ありかたし

9 中のこのかみ(七二四・10・335) おと、ひの中の兄といふ也

10 この住所はひせんの国(七二三・8・334) 少式任はて、肥前

ニ住歎一勘同之

11 大夫の監(七二三・10・334) 大宰監なるもの、叙爵したる也

監にこりてよむ

12 さまかへたる春の夕暮也秋ならぬ共あやしかりけりとみゆ

(七二五・7・336) 引哥あやしき心はかりを取歎

13 をはおと、出あひて(七二五・8・336) 玉かつらをむまこと

云し心く云、

14 天下に(七二六・5・337) わさごとくしくよむへし監か

詞也

15 としをへて(七二六・14・338) 哥の心面は玉かつらの君をか

ねていみしき御さいはひくよとねんしつるに彼監にとられ

なは神をつらしとおもはんと也監かおもはん所をも忘てよ

めくのはうち思ひけるまくと詞にもかけり

16 いかにおほせらる、(七二七・1・338) 哥を監かとかめたる

也八二九ウV

17 この人のさまことに(七二七・2・338) 玉かつらをかたわあ

りといひし事也

18 ひきたかへ侍らは(七二七・3・338) さきの哥に心を尺しか

へてむすめのこたへし也其心はいのる心はさいはひ也さる

をかたわによりて引たかへは神をもつらしとみえんと也如

此一首を心をかへて用ル例アリ引たかへ侍らはつらく一此

事哥の心を弁しかへたるならばきこえひかめといへる如何

云、

19 うき嶋をこきはなれても(七二八・7・340) うき所をと云心

有兵部卿君哥うき嶋とにては非名所しほかまのまへにう

きたるなとよめるは名所也

20 行ききもみえぬ(七二八・八・340) 玉かつら哥也身の上によ
そへたる哥也尤哀成哥也ナレ

21 うき事にむねのみ(七二九・一・340) 玉かつら哥云、一勘兵
部君云、如何

22 からとまり(七二九・三・340) 八三〇オV

23 川しり(七二九・三・340) 摂州也

24 はか／＼しきらうとうとも(七二九・五・341) 我をあしと思
ひて余の人のおもはんする也ヒレ

25 胡の地のせいしは(七二九・八・341) 在河海從漢攻胡之時
漢人止胡国不得婦漢軍敗之故也後又く漢攻胡之時ナレ

人欲婦漢也此時棄胡妻子而漢不入被入剩困之号ナレ

敵国住人、也仍兩國无便之意叶物語喻云、ナレ

26 松浦はこさき(七三〇・13・342) 箱崎は八幡同味也松浦事在
河海若其儀歎不分明云、又在花鳥ナレ

27 としへ給へは我君をはまして(七三一・6・343) 我君玉かつ
ら也まして藤氏を取わけての心也ナレ

28 こしとはやくおやのかたらひし(七三一・2・343) 八幡宮

五師五人ある事歎八三〇ウV 一勘五師はた、法師のつかさ
也五人事不憚八幡宮ニかきらす諸寺ニ五師はある也

29 つは市(七三一・13・343) 長谷寺の近所のやうニみゆ

30 あるかきり三人(七三二・2・344) 少式か北方 兵部君玉か
つら三人也

31 家あるしの法師(七三二・4・344) はせのふもとの里ときこ
ゆ

32 かしらかきありく(七三二・9・344) これをいとをしけれと
ゝいへり

33 これもかちよりなめり(七三二・6・344) 右近玉かつらの事
祈ゆへの懇志歎ナレ

34 せしやう(七三二・11・344) 一勘云軟障と書幕のやうなる物
にたかき松なと絵に書て壁にそへて引也

35 かいねりにきぬなときて(七三三・14・346) かいねりの事愚
存載花鳥一勘

36 卯月のひとへめく物(七三五・9・348) 或は一のしひとへと
あり此説不用

ありおやまれりうすきぬの事云く見花鳥一勘八三一オVのしをか
けたるひとへ云、如此

37 かくれ給へりし御すみか(七三三・八・三六)夕良の宿の事

38 兵藤太(七三三・一〇・三六)此名も例ありき照宣公の内ニあり

（志）
（奈）
（ナ）
（シ） 聖後介の「也」

39 おとゝはおはすくや(七三四・五・三六)玉かつらのめのとの事

40 君の御ことはきこえず(七三四・六・三六)夕顔のうへの事也

41 たいめしぬへく(七三四・九・三六)本

42 またゝき侍く(七三五・一・三六)存命の心也

43 そやおこなふ(七三五・一・三六)初夜

44 西のまにとをかりける(七三五・一三・三六)玉かつらの局は末

の方それは右近か局ニ遠き心也右近か局は仏ニ近しとあり

堂は東向也其左右ニ局あり其局より西の局はとをしと也

45 仏の右のかたに(七三五・一三・三六)長谷寺宿老次（奈）第二（シ）権局（シ）舎（シ）

入宿也入三一ウ

「またふかゝらぬ（シ）は不宿老心也（シ）」

長谷寺東向すこし南ニ向り

46 この国の守(七三六・九・三六)大和守也当國為神領事（近）代事

也

47 しみつの御てら観世音寺(七三七・三・三五)筑前国観世音寺

見万葉如何 一勘清水の御寺も観世音寺同事故清水は在所の名也

48 其人この比なん見奉り(七三七・九・三五)わざと此比とおほ

しめかしたる也

49 又お（奈）出給（奈）ふ姫君(七三八・一・三五)明石姫君中宮事

50 我にならひ給へること(七三八・一〇・三五)双也源氏我身をよ

きためしにの給心也

51 しれる大とこの（奈）塚（奈）に(七三七・一三・三五)つは市の宿にはあ

らす御堂のつほねより宿坊ニおりたる也右近か御師なるへ

し

52 うれしき瀬にもと(七四〇・八・三五)引哥河海

53 はやくの事は(七四〇・一〇・三五)哥ふるき事は知給はぬと也

玉かつらの給（奈）也入三一オ

54 里（奈）ひ（奈）たる(七四一・三五)ゐ中ひたる也所によりて又儀あり

55 みかとひき入くるよりひろくと(七四一・一一・三五)二条院

の目うつりにて云也

56 なぬか過侍れと(七四二・二・三五)右近かはつせへまうてゝ

婦まで七日斗なるなり玉かつらの三日といひしにその程かなへり

57 おとゝも御覽して(七四一・14・355)紫上の御方にて源しも御覽したるにはあらず別に御覽しける世次の詞にきかせ奉らてと右近いへり可知

58 女君は廿七八には(七四二・8・356)廿八才なるへし玉かつらは四才にて肥前にくたる少武任五ヶ年也廿年斗過て六条院へは廿二にて迎

59 御足まいりに(七四二・12・356)足をさする事也

60 年へぬるとち(七四二・13・356)右近に源しのかたらひ給と紫上のむつかり思給へきにやと源氏の詞也△三三ウV

61 ざるましき心と(七四三・2・357)紫上詞 源しの心をさあるましきこゝろともみねはあやうしとの給て右近ニたはふれ給也

62 この君とゝの給(七四四・1・359)紫上をの給く也

63 つみかるませ(七四四・12・360)夕白の上をむなしく見なし給罪の事を云

64 しらすとも(七四五・8・360)玉かつらは知給はくぬとも也

65 たゝかことはかりにても(七四五・12・361)すこしの事也かこと斗もあはんとそ思くの哥もすこしの事也

66 右近か数にも侍らす(七四六・2・361)

67 うきにしもかく(七四六・7・362)うきは泥也

68 さふらふ人のつらにや(七四六・11・362)中宮につかうまつる人にまきれんと也

69 うしとらの町の西のたい(七四六・12・362)

70 人のうへにてもあまたみしに(七四七・4・363)源氏の紫二の給也人のうへにて△三四オVもとは源しの我にうへの事との給はぬ也憚て也又は我もと聞し事思はぬ中もとはおもふ中も又はさしもおもはぬ中などにも女の心ふかきを見聞しに女に事にすすすきしき心をつかはしと思しことくの給也

71 すかゝしう(七四七・13・363)

72 をうなになるまで(七四八・8・364)孀也

73 中将を聞えつけたる(七四八・9・364)夕霧中将のよしこゝにみえたり

74 十月にそわたり給(七四八・5・364)イ本十一月可用之歎

75 みきちやうのほころひより(七四九七・365)玉かつらのを
もと人共の源氏を見奉る也

76 右近かいはな^{ナシ}く^{ナシ}ては(七四九八・365)つま戸なとなるへし
77 この戸くちに(七四九八・365)はしめたる所にあへしらひ
也八三四ウV

78 あした、すしつみそめ待^くー(七五〇七・367)玉かつら三
四^の年のほと、いふ心にて三とせになりぬの哥の詞にての
給へり

79 恋わたる身はそれなれと^{から玉かつら}(七五一七・368)身とは源しの
事也いかなるすちとは玉かつらのいかに尋き給^{ナシ}ふらんと也
実父にこゝろさしそあるらんのやすらひ也

80 あはれとやかて(七五一七・368)夕かほの事をの給し也

81 けんかいきさし(七五二二・369)本見河 いきまきしイ本

82 人をしたかへ事をおこなふ(七五二七・369)豊後介孝心有
て遣^{ナシ}く^百無^奈をたかへす忠貞^{あり}にて玉かつらを京^にへくし奉^{ナシ}りしに
^心こたへて面目をほとこしけるなるへし

83 さていつれをとかおほすと聞え給へはそれも鏡にてはいか
て八三五オVかときすかにはちらひておはす(七五三三・

371)紫^{ナシ}の上の事問云それもかゝみにては也といふ説あり如
何不覚悟一勘

一勘紫の上の心に人のかたちのよしあし^きも鏡にてみるや
うにはいかてかをしはかるべきと云也

一鏡にてみつからみる心也師説

84 さくらのほそなか(七五三三・371)ほそなか貴女のきると
云、一勘云おさなき上臈のうへにきる物也下にかさねの
きぬはあるへき也

85 くもりなくあかき(七五三三・371)きぬの事也

86 いまやう色(七五三三・371)ちかく出来たる色なればかく
いふ

87 此かたちのよそへは(七五四三・371)源し紫上の人のほと
を見給はん心^むをまきはさん^むとの給詞也

88 すあつむの御れう(七五四五・372)わざと似合ぬめてたき
を送給也八三五ウV

89 人しれすほゝゑみ(七五四六・372)同心也

90 御れうにある(七五四九・372)源しの御料也

91 ゆるし色(七五四一〇・372)くちなしの事也 紅葉のゆるし

色にてはなし淺黄ナレ深は輕紅非制限古詞此心にての給し也

92 きてみればうらみられけり (七五四・372)

93 あふよりにたる (七五五・4・372) 同河海

94 さかしらにもてわつらひ (七五五・8・373) 末つむの返しの
よからぬナレさかしらありとの給へり

95 はつかしき (七五五・8・373) まみなり まみけしき
源源のさま也きみ也はすゑつむを嗟して源氏のの給へる也
ほめたるやうにいひなし給へる也

96 こたいの哥よみは (七五五・8・373) 八三六オV

97 人のなかなることを折ふしおまへなどのわざとある哥よみ
のなかにてはまとのほはなれぬみもしそかし (七五五・11・
373) 三文字也大かたの人の事をの給詞おりふし人のくまへ

などにてわざとかましき時哥よむ人のまとなと云三文を
やゝもすればはなたすよむと也

98 いまめきたる詞ことのほ(志)にゆるき給はぬこそねたき事は又あれ (七
五五・10・373) 例のこと也

99 やすめ所 (七五五・13・373) 中五々字ナレ

100 よくあんないしり給へる (七五五・14・373) 古き事をしり給
ふと也

101 めなれてこそ (七五六・5・373) かくめなれたるとわらひ給
也

102 をしかへし給はさらんは (七五六・13・374) 文の返事ニ哥の
あるにはをしかへし返哥あるへき常の事也かへしやりてん
とありしにこたぐてなり

103 うちあはぬ人の以上(志) (七五一・2・367) 物とをきやうなる心也
八三六ウV

104 とのもすくれたりと (七三八・9・352) 業上ナレの事

105 うへの御かたちはなをたれか (七三八・8・352) 夕かほの上
の事を云

106 哥まくら (七五五・14・373) 一勤 哥枕とは名所の哥をあつ
めたる草子なり五代集哥枕能因撰之

107 髓腦 (七五六・3・373) 一勤 廉主石見女髓腦と云は昔の和哥
抄也新撰髓腦は公任卿の撰也 八三七オV

はつね

玉かつらのならひはみな堅也

此卷 源氏君卅六歳

1 さすかに打とけて (七六三・七・377) 前くの詞にいかめしう書たるに對していへり

2 いとしたゝかなるみつからのいはひ事共かな (七六三・13・378) 源しのさしのそき給事を人々はしたなく思ふへきゆへに詞をかけて過給へる也

3 うへにはわれみせたてまつらん (七六四・6・378) かくの給へるのみなるへし

4 五えふの枝にうつる鶯も心あらんかし (七六五・1・379) 拾遺哥を思てかけり松ニ鶯は初ねの縁ある物也思心あらんと

は折にあひたる作物なれば鶯も心ありてしなしたると也

5 とし月を松にひかれて (七六五・3・379) 經人古人兩説也古人とは卑下の心也

6 くだくしくそあめる (七六五・10・380) をよそ哥のくだくしくしきはよろしからぬ事をしらせんためにかける詞なる

へし

7 さはらかに (七六六・14・381) あらくとかゝりたる様也

8 いとむつましくありかたからんいもせの契けり聞えかはし給 (七六五・14・380) よるなととまり給事はなけれととしころのことく夫婦の契はかりはいまもかはらぬ心也一勘

9 かくへたてなく見奉り給へとなを思にへたりおほく (七六七・2・381) 源しにへたてなくなれてもなをまことのおやならねはまほならずもてなしたる也又は源しの心ともみえたり

10 からのとうきやうき (七六七・12・382) もろこしの東京といふ所に織たる物欸一注或也百地の錦なるへしと云、八三八オV

11 ひおけ (七六七・13・382)

12 てならひともの (七六七・14・382) すちかはりとは常の人の見なれたるにもかはりて故あるとほめたる也

13 されからず (七六八・1・382) されてもからぬと世うちとけぬるにも心みゆるへし

14 こゑまち出たる (七六八4・382) 引哥未勅

15 けやくし (七六八14・383) 尤也わつらはしき心なるへし

16 りんしかく (七六八4・383) 客きやくとよむへし一勘りんむ

しきやくは撰関家にての名目也但六条院は大臣ながら執政

くノをもちかねたる程なればなすらへていへる也一勘とま

17 またひらけさらん心ちも (七七〇2・384) 彼連の中ニ劫を

経る間ミの不足あるのみ也仏を見す説法をかかず仏を供養

せず云くひんかしの院などにある人々のおまニ似たりハ三

八ウV

18 物のしらへとも (七六九12・384) 花鳥

19 まして流のよとみ (七七〇11・385) 髪のしろくましりたる

を云り

20 かいねりのさいくしく (七七〇14・385) さやかにたと云

かことしやはらかならぬさまにや

21 かさねのうちき (七七一1・385) うちきはうちたるきぬ

也ひとへといふ物はきぬの下ニかならずきる也かさねは

五きぬ五五ノイなとあまたかさぬる事也

22 かはきぬはいとよし あへなん (七七一14・386) ありなんむ

といふ詞也 三注一私不審

23 もとよりおれくしく (七七二3・385) 愚ナレなるく也

24 むかひの院の御くら (七七二5・386) 二条院の蔵也東院よ

りむかいと云り東院東院のむかひなるへしよりむかひなるへしトイへり

25 かのあさましかりし世のふることを (七七三七・388) 空蟬

か身ニくるしきハ三九〇V事となるへし紀守か心なとに

や

26 おとこたうか (七七四4・389)

27 かうこし (七七五9・390) 花鳥

28 水むまやにて (七七四13・389) 踏哥の人のうたひて院ナレな

とをめくるを駅路にたとへていへり水駅飯駅と云ことく踏哥

ににも家によりてその作法ありしかるを水駅なるへきにね

29 あを色のなへはめるにしらかさねの色あひ (七七五1・

389) 麴塵ともいふ腋あけのうへのきぬ也しらかさねは下か

さねのうらおもて白うちたる物也兩条以上一勘

30 かよれるすかた (七七五5・390)

31 万春楽 (七七六6・391) 花鳥ハ三九ウV

32 わたしの後宴（七七六・391）禁中にて踏哥の後宴とて二月三月ニ弓の結と云事ありそれに比して私にて女楽を後宴にすへしと也此女楽事こゝにての給へるはかりなりき竹川歌巻にみえたりまへの詞に御かたゝの人員給とあれと又其内の事をかける也八四〇オV

胡蝶

玉かつらのならび 豎並也

此卷 源氏年 卅六三月より夏迄

1 外の里には（七八一・2・395）ふりぬとはいまたをしなへたらぬ此所の花鳥たくひなくおもしろく新なるよりおもふ心也

2 かるらかにはいわたり（七八一・8・395）昔の中宮なとはおなし院のうちなと^ナうちなと^ナにくてもたやすくわたり^{ヒ（ホ）ヒ（ホ）ヒ（ホ）ヒ（ホ）}

給はぬ心く^ナなるへし^ナ

3 わかき女房達（七八一・9・395）中宮の女房達也

4 つり殿（七八一・12・395）亭^ナなと也

5 龍頭鶴首（七八一・12・396）おろしはしめさせ給日はうたつかさの人めして船の楽せらる末ニ龍頭鶴首女ともをのすとみゆ八四〇ウV同舟なるへし楽以後の事にや

6 こなたのわかき人々（七八一・12・395）紫上方の人々也

7 外にはさかり過たる（七八二・5・396）ほかのちりなん哥の心下ニあり

8 風ふけは浪の（七八二・12・396）此哥共は中宮の御かたの人々南のおとゝの人々の哥也

9 山ふきのさき（七八二・12・396）名所也 宇治 近江共別の哥未見云、

10 皇^ナ鹿^ナ章^ナといふ（七八三・4・397）

11 双調ふきたてゝ（七八三・11・397）

12 かへりこゑに喜春楽立そひて（七八四・2・397）喜春楽も呂也かへりこゑ律の呂になるにや 呂律次第

13 春のしらへは（七八三・14・397）そうてうとあり律にや

14 中宮は物へたてゝ（七八四・4・398）春の御かたをねたうおほしける也八四一オV

15 さうとき（七八四・14・398）はやりかなる心也けさう心に

そかはしき也

16 ふちに身なけん(七八五・三・399)淵ニ也藤にそへたり

17 おなしかさしをとてまいり(七八五・四・399)花鳥

18 中宮の御読経(七八五・七・399)六条院にてありとみゆ有例
歎

19 やすみ所とりつゝひの御よそひにかへ給人(七八五・七・399)一勘河海にいへるあやまり也別ニ口伝アリ夜とまり給

しか昼の衣装ニきかへ給也云、禪合開闢又注アリ云、

20 あくら(七八六・四・400)胡床などにこしかけたるなるへし
云、一覽

21 きやうかう(七八六・五・400)行香

22 鳥てうにさうそきわけたるわらはへ八人(七八五・12・399)

花の陰に舞出るとあり花瓶もちたるわらはのすなはち鳥蝶の舞人なるへき也(四一四)ウVわらは、鳥蝶の舞人也これは今の世にもある事也

23 鶯のうらゝかなる(七八六・九・400)おりふし鶯の鳴たるね也鳥の楽ニあへり

24 てうはまして(七八六・11・400)舞人云、まことの蝶も籬の

もとにまふ心なるへし鳥の鶯鶯ニのこゑをあはせしことし云

く一禪蝶はた、童のまひたるすかたなるへし用此儀

25 もの、師ともはしろき一かさねこしさしなと給(七八七・1・400)しろき一かさねとはきぬのことにや一勘合点

26 藤のほそ(七八七・2・400)女なかにしの装束とは装から
きぬなど成へし

27 ねになさぬへく(七八七・3・400)我やとの梅のほくすツツ系に
くし

28 こてふにも(七八七・4・400)へたつる心あるにや心有てへ
たてすはと也

29 すくれたる御らう(七八七・5・400)上らうふたちのはくにはさ
しもなきと也

30 くはしければ(七八七・7・400)むつかしといふ詞まで物語
作者の語也(四二二)オV

31 ふかき御心もちひや(七八七・11・400)さまゝに注した
れと深きとは心の奥をはしらすと也

32 おやかりはつましき(七八八・1・400)密通の心ある也され

はまことのおやにしらせやせましと也

33 此君にひかれて(七八八五・402)夕霧に立そひなとし給也

34 そのかた^のあはれ^には(七八八五・402)玉かつら岩もる中将をえんなるかたならておと^ゝいの心下にかよふ也

35 ^{ソレ}そ^くくのかし(七八八三・402)

46 かやうのすちの事なんへたて思(七八九三・402)兵部卿と

源氏とすきたる方はへたて給事ありしと也

37 くしのたうれ(七八九九・403)盗跖と孔子との事となる

へし未詳

38 大将はおほなく(七九〇一〇・404)ねん比なる世間云孔子

ノ事相当する也八四二ウV一答大略孔子の事歎たしかなる

証拠なし

39 此ころの花の色(七九〇一四・404)卯花なるへし

40 さはいへとる中ひたる(七九一一・404)右近は玉かつらを

る中ひたるやうに見し世源しはそのはしめはる中ひたりと

見給し也上様の故也

41 をのつから思あはする世も(七九二二・406)玉かつらのお

と^ゝいと知へきと也先いひまきはさんとの給へり

42 世^にの人のあめる方に(七九二七・406)しかるへき人の室にも成給てと也

43 大将はとしへたる人の^いいとひかてらに^い思ひきためかね

侍る(七九二一三・407)玉かつらの事を源氏の心ニ思定^くか

ね給也大将事は傍人^{な陰}と無^{な陰}正^{な陰}射^{な陰}よしを思へりことほりな

れはと也大将は本台をすきめて玉かつらに思かけたるもわ

つらはしと也そらにてといへる心見るへし

44 をのか世^ににや(七九三一四・408)人にしたかひて源しと世

くをへたてんとよみ給也八四三オV

45 ゐさりいて、(七九四一・408)すこし礼ある心也玉かつら

の哥にはまことのおやの事に取なしてよめるなり

46 むかし物語(七九四六・408)住吉物語などにもおやにもう

とく成し事あり

47 うしろめたくのみこそ(七九七四・411)源しの心さしのふ

かきやうなるはあらしと也

48 をろかには見はなち給とも(七九七一一・412)上の詞ニまこ

とのおやなりともと源氏^にをありかたく思給し心又立かへり

うたてく思給ふくと

49 うち世なれたる人の (七九八13・41) 大方の世く人のなか

らひをも玉かつらイサシいまたしり給はぬ也

50 もしはめくさけきましかるへきよほ (七九〇4・401) さ程な

らぬ人の事の外思あからんむもけやくくことくしくおもはお給

ゆとなり
おほくと也

51 いと見しらすせしもあらし (七九五3・409) 紫上のみしり給

へしとなりハ四三ウV

登

豎並 源氏卅六夏

1 五月雨に成ぬるうれへ (八〇六2420) 五月ニハ人にあハぬ

愁をいへり古哥ニアリ

2 物などの給さまを (八〇六11・421) 源し蜚の兵部卿官の物

の給ハんむさまなとをゆかしと也

3 御句のたちそひ (八〇七8・422) 源しの句也

4 蜚をうすきかたに (八〇八7・423) 禪合御説木丁ニつゝミ

てをきかたしたゝなをしの袖につゝミてさとはなち給おふな

るへし此儀可然云、うつほの物語にもなをしの袖につゝみ

ていたしたる事あり但如何夕つかたより用意し給なるへし

5 うちくハしらて (八一〇3・424) 源しの父ならぬ事をし

らぬ也ハ四四オV

6 さるはゆかしけなきさまにハ (八一〇7・425) 蜚に玉かつ

らの事也源氏の心をのこす也次ニ中宮なるといへり利相

逆也

7 馬場のおとゝに出給おふつゝるてに (八一〇14・425) 東の御方

のにしの対に玉かつらる給し程に馬場ニちかし

8 つやも色もこほるハかりの御そになをしはかなくかさなれ

るあハひにいづくにくハゝれるきよらにか (八一14・

426) つやハ色の外にある也 なくをとくハゝれるきよらの奇

特なると也

9 色もかへぬあやめも (八一15・426) 文目也あやめによせ

ていへり

10 ためしにも引出つへき(八一・10・426) 長き根のあやめ也
11 あらハれていと、あさくも(八一・13・426) 宮のおもひの
無分別なるとにや

12 わか／＼しうとハかり(八一・13・426) 宮をわか／＼しう
と歎

13 中将けふのつかさのてつかひのつゐてに(八一・25・427)

△四四ウVてつかひハ騎弓の時二人つゝつかひている事歎
但未勘之一勘

14 すその凡丁(八一・23・427) うへはしろくてかたひらの
すそを紺にても紫にても濃染たる心也いまの世にも車の下
すたれハ如此

15 あふちのすその裳(四一・31・427) 裳にもきぬのことく
色／＼あるへき歎答さのみおほくきぬなどのやうにはなき
也すそこなとハ勿論也

16 四人(四一・31・427)

17 からきぬ(四一・32・427) 問云つねのきぬと差別如何 答
裳をきる時ニ着するを唐衣と云今の世にも髪上の内侍など

は着之一勘

18 なたしこのわか葉の色(四一・32・427) うらもよきなり

19 こなたの(四一・32・428) 花散里也

20 けにみこたち(四一・35・428) 源しのおほし、ことくなる
也△四五オV

21 てつかひも大やけ事にはさまカハリてすけたちかきつれま
いりて(四一・36・428) 左右の騎射ハ公事也中少将ハ不将

之六条院にてハ羽林ともいるをいふ也一勘

22 打毬楽らくくめん(四一・30・428) 納曾利イ

23 そちのみこーおほ君けしきにそ(八一・44・429) 孫王めく
也

24 なをあるをはよしともあし共かけ給ハす(八一・46・429)

花散里の批判の外の主をハ善悪を 源しの、給ハぬ心也

25 そハみきこえ給ハて(八一・41・429) うらみなどし給ハぬ
くと也

26 そのこまも(八一・51・429) 菖蒲をは馬食せず花散里のは

へなきにたとふされとけふの御遊になくさみぬと也

27 にほとりに(八一・53・430) 此哥の心にほとりハ枕詞也か
けをならふる鳥なればよめりわかこもとあやめとかけをな

らふる也八四五ウ

一引わかるへきとは花散里と源しの御中との事をたハふれ給ふ也ナレ

28 あいたちなき(八一五三・430)上の詞のさま也

29 ゆかをはゆつりきこえ給て(八一五六・430)床をハ源しにゆつり給歟

30 すみよしのひめ君(八一五十四・430)さしあたりけんとは其ナレ時をおもひやるハ勿論可然姫君のさまとみえたり今の世ニ思ふもと也

思ふもと也

31 かそへのかみ(八一六一・431)彼物語ニまゝ母のはかりて父ニ讒しける事也

32 ほとくし(八一六二・431)おとろくしき也

33 物うるさかりせず(八一六四・431)うるハしからず也

34 いたつらに心うこき(八一六九・431)古今序絵ニかける女の事可思也

35 らうたけなるひめ君の(八一六〇・431)姫君の心つくとなとをいさむる心也

36 けにいっはりなれたる人や(八一七一・432)玉かつらの語

也八四六オ

37 神代より(八一七三・432)瞬しての給也

38 よきもあしきも(八一七六・432)又なくさめての給也

39 人にしたかハんとては(八一七九・432)紫式部作意を心にこめの寓テ述ル也

40 人の御門のさえ(八一七〇・432)才也云々ナレえにて詞たるへき歟柏愚案祇同(案)

41 仏のいとうるはしき(八一七三・433)方便の教ニ空をえし弟子共方等部にて速悲せし事在之然て方等経をは諸教ニ通して太乗(大)初門たりとほめたり別ニ注之 別注凡如来出世の本意ハ凡聖一如善惡不二のことハりを説て衆生のまよひを速ニひるかへさんとおほしめす心あれば大悲のきハまり是ニ過たる事あるましき故ニうるハしきといへる歟この故

ニ因も実報花王の土を現し仏も報身のすかた説法も三界唯心八四六ウの法なれば仏の心も法もうるはしきすかたなるへしこれ花嚴経(花)の分也(分)

42 方便といふ事ありて(八一七三・433)取初ニ大乘の法を説

給ふ事ハ本意也され共時いたらざる衆生に不相応の法を説

給へハ機教相違するゆへニ三七日思惟の内証

より実大乘をやハらけて十二年権教を説給へ

り其中ニ阿含經一向の小乘也仏も劣応身所化

も髮をそり衣を黒黒ナシニ染ル事此時よりはしま

れりまことはさもあるへき事ならねともあま

りに衆生の物ことに執心ふかき故にこれをや

ふらんとてかやうの方便をまうけ給ふなり

43 さとりなき物はこゝかしこにたかふうたかひををきつへく

なんなんハ四七オV方等經の中におほかれと(八一七14・433)

阿含經の四諦縁生の法門法門ハ全如来の本意ならぬを所化の機

根いやしくてまことまことも修行して法界空の理をはしらすし

て只心あれハこそ身あれハこそと思て但空偏眞の理ニ落ハ

てたり故に仏又手をかへて衆生を引導し給ふ故ニ方等經の

中ニ四教をならへて色いろに説ましますこれは浄名經等に

て侍り侍り此時昔のさとりにもつかす今のさとりをもえず所化

花ム三七日	阿含十二年	般若廿九年	或廿年法花	八年	没梁一日一	夜	方等無跡	時	頭書V
-------	-------	-------	-------	----	-------	---	------	---	-----

の衆生たゝハウせんとしたる心歇心歇一會の衆。有空錯亂し

て迦葉泣て三千ニふるひ善憫吉然として手ニ一一射射もなくなくこ

れにより深く深く恥恥小小慕慕大大ノ機ハ直ニ円に越へ或ハ別ニす

ゝみ或ハ通にかなひ又ハ三歳ニとゝハ四七ウVまるされは

四教並對の教ともいひ又彈阿阿ともいふ也

44 いひもてゆけハひとつむねにあたりて(八一八1・433)般

若調法の心歇彼阿含ニして碎空碎空破の空理

ニしつミ方等にして有空錯亂せしをいま畢竟皆空と説て彼

等の機をゆりそろへて有空一念のさとりを与へ給ふこれを

いひもてゆけはひとつむねといつる歇又般若ニかきらす方

法一如の心歇云、

45 菩提とほうなうとのへたゝりなんよくいへはすへて何事も

むなしからず(八一八1・433)

法花經の内証あらハれてみれば塵ニ一色一香しかくしかくなから

ナレ

純一実相にしてさらに別の法なし天際日のほり月くたり蓮

葉はまろく松葉はほそくして是誰かなせること八四八オV

ハリそやた、天ものいはすしてをのつから四時のおこなは

れたる道ハかり也如此すかたをハ、かる事もなく説。故ニ

よくいへハといふなるへし真実といふ^之心也四十余年ハ真

実ならずとみえたる歎善提と煩惱とのへた、りなき事は龍

女か無后世界の成道にてきこえたり毒龍の角をすて鱗をか

へたるにもあらず只其ま、の成道也彼ノ意未開会の時はし

はし煩惱并を二所ニ立テ生死涅槃の二説ニへたて或ハ方便

真実を相待^{ナレ}シ余前余後をかたく分ち今法花開会の前ニハ此

妙妓妙両義無^{ナレ}ク双にして全く余前余後とたてざる也三毒三

身無自性なれハ三悪四趣則毘盧身土煩惱菩提本不生なれば

生死涅槃又空花の開落也これしは法花ハ四八ウV得益の

一機^{ナレ}の始終也つらく其実事をふみ見れハ四十余ノ年の勞

功も是ニあらず非ニあらず又いつれか虚いつれか実何ノ方

便を廢して始て真実ニと、まらん凡一^{代ナレ}伐ノ御法色々さま

くなるはた、根機の問うると聞えさるとによるへし

46 いみしくけとをき物の姫君も御心のやうにつれなくそらお

ほめき^くたるハ(八一八5・433)何の姫君ともなし

47 かくていかなるへき御ありさまならん(八一八14・434)玉

かつらの身の行を物語の作者いへり

48 こまの、物かたり(八一九2・434)一勘花鳥ニこれをしる

す

49 わらハとちたにいかに(八一九4・434)

50 けにたくひおほからぬ事共ハたのミあつめ案へりかし(八

一九9・435)草子ハ四九オV共の事也又源の見あつめ給事

也云々好ミあつめたる歎此見あつめ歎花鳥又一儀アリ

上の詞のつゝまろこそ猶ためしにしつへく心のとけさハ

人に似さりけれと聞え給けにけに以下双子詞歎源氏好色

の事歎

51 うつほの藤原の君(八一九10・435)藤氏ならず一世源氏の

人の女也^{異名也詳花} 異名也詳花 あまたの人のいひしにもなひかすつ

ゐに内へま^番いりし人も也これもあまりなりとの給ふ也

52 うつゝの人も(八一・九三・435) 現存の人をいふ也

53 よき程にかまへぬやといひのよしなからぬおやのー(八一・九一四・

435) かまへぬやといひのこしてよしなからぬを下の詞ニつ
けてみるへき歎云々又了簡アリ八四九ウV

54 まゝはゝのハラきたなき(八二〇・六・436) 心の悪きをいふ
也一勘

55 中将君をこなたには(八二〇・八・436) 夕霧の宰相紫の上の
かたにはうとき也

56 たいはん所(八二〇・12・436) 六条院の女房のさぶらひ也

57 やんことなきふしには(八二二・七・437) ことさらにたて、

雲井の鴈の事をは思給ふ也

58 たふるゝかたに(八二二・九・437) 倒也 おれたる心也

59 さかしらにわか子といひて(八二二・七・438) 内大臣詞さし過
なとよからぬ妹也

60 住吉物語事(八一・五・14・430) 継母のまゝ女ニ約したる人を
わか女ニあ^{ハナレ}いせん^{ハナレ}とて父ニ讒言して主斗頭といふむくつ

けき男をまゝ女の方へ入て父ニいひてわか女につるニあハ
せたりし八五〇オVかとあね女ハいうなる名の残たれは也
八五〇ウV

付記

伊井春樹氏の翻刻の「凡例」中より若干摘記すれば次の
ごとくである。

1 本文を引用している各項目の下に、読解の便を考えて、源
氏物語大成の頁行数を、更に日本古典文学大系本(岩波書
店)の頁数を付した。例、帚木14えんすれは(三二六・12・
57) 上段の(三六12)は源氏物語大成の頁行数を表わし、
下段の(57)は日本古典文学大系本の頁数を示している。

2 原本の書入れ、見せ消ち、朱筆による校合は、それぞれ
(後筆)、(ヒ)または(ッ)、(朱)として示した。しかし
朱による多くの合点は、煩瑣になることを避けるため、一
切省略した。

3 欄外になされた書入れの注記は、該当箇所下部に枠で囲ん
でA頭書Vとして示した。